

町史

とっておきの話

202

長岡・河井継之助記念館友の会会員
高梁方谷会会員

小名 泰裕

山水相應蒼龍窟

さんすいそうおうそうりゆうくつ

司馬遼太郎が河井継之助が眠る地にふさわしいと称えた塩沢



河井継之助は、長岡藩の藩政改革を行い、「ゆくゆくは蒸気船を買って藩士の次男三男に貿易をさせる」という考えを持っていました。長岡藩そのものを一個の法人のようにさせたかったようです。そのあたりの先見性は亀山社中を作った坂本龍馬とよく似ています。

しかし、龍馬との違いは、龍馬は「藩などどうでもいいではないか」と言って藩外に株式会社を作ります。

一方、継之助は「藩こそ大事」と藩を株式会社にしようとしました。その夢は破れ、河井継之助は塩沢で亡くなります。そのような河井継之助を『峠』の執筆者・司馬遼太郎はどのように思っていたのでしょうか。

只見の河井継之助記念館には、司馬遼太郎の揮毫が二つあります。そのひとつが、

『山水相應蒼龍窟』です。記念館のパンフレットを読むと

「司馬遼太郎は、昭和四十九年（1974年）ここを訪れ、風光明媚な塩沢が継之助の眠る地にもっともふさわしいところとして『山水相應蒼龍窟』という揮毫を残している」と解説しています。

さて、私は、『峠』という河井継之助を主人公にした作品について、二つの疑問をもっています。ひとつは、

「なぜ、司馬さんは、河井継之助を主人公にした小説『峠』を書いたのか」

もうひとつは、

「『峠』を書くにあたって、河井継之助の少年、青年時代からではなく、なぜ、幕末時には中年といわれる三十代から書き始めたのか」です。

昨年、大河ドラマ『龍馬伝』が放映され、司馬遼太郎の『竜馬がゆく』も話題になりました。『竜馬がゆく』については、司馬遼太郎記念館、上村洋行館長の講話に、

「司馬さんは『人を動かし、藩を動かし、国を動かししたひとりの人間の魅力』について書いた」と話しておられました。

した。当然、小説も終ってしまいました。

ところが、ここで奇妙な偶然があります。『峠』の書き出しは、河井継之助がまもなく三十三歳になろうとしている暮れの十二月、三国峠を越して江戸へ遊学するところから始まります。継之助にも少年時代、青年時代に多くの逸話があります。『峠』でも回顧談として書かれています。

司馬さんは、『竜馬がゆく』では書けなかったテーマ、「侍（立場）の矛盾」「人間の死」とかについて、『竜馬がゆく』の続きとして『峠』を書いたのではないのでしょうか。これは、私の勝つてな想像でしかすぎません。『竜馬がゆく』は、昭和四十一年五月に終了し、その半年後の十一月に『峠』の新聞連載がはじまります。

龍馬は、死の直前まで自分の死について考えなかったでしょう。考える間もなく絶命してしまいます。しかし、河井継之助は、長岡城下で負傷し、八十里越を越えるときから、そして只見の十二日間、自分の死について考えています。

河井継之助が、自分を焼くであ

ろう焚火を冷静に見つめる姿から『峠』のあとがきに、

「自分というものの生と死をこれほど客体として処理し得た人物も稀であろう。身についたよほどの哲学がなければこうはできない」

とあり、エッセイの『手彫り日本史』を読むと

「私が小説を書く人間になつてほんとうによかったと思えたのは『国盗り物語』や『竜馬がゆく』『峠』を書いたときです。人間は、いつかは死にますが、その時の「遺書」のつもりで書きました。日本人とはいつた何者か、というのが一般的なテーマなんですがね。自分が日本人について考えたことを小説にしておきたいというはつきりした意図で書いたのが特に『竜馬がゆく』と『峠』です」と書いてあります。

司馬さんが、河井継之助が焼かれたであろうダム湖の水面を四半時ほどながめ、『山水相應蒼龍窟』という揮毫を残した理由が分かるような気がします。

河井継之助と塩沢の印象を表現した司馬遼太郎の書

